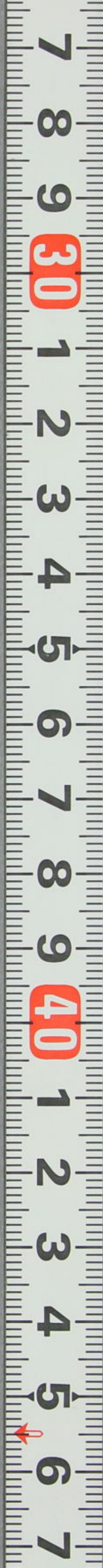


御詠一葉集

五

利
1258
5



能譜一葉集附合之部四



元禄五壬申

其多也餅之巻する様の先
りそと古と新一色のみささ
善父入ハ只義入と尺さくけ
りくさみふり第一持こ
却る物有款く二つあり
何と此ぬり毎の巻たあ

古学庵佛号
幻窓湖中
坎窩久藏

編 校

支考 翁 考

烏
 香の舎すくくつ時れき
 基子ね百千もあさきか
 くちくしと音守の物もあや
 瓦りよれは作新朱純
 二三季迄のハ音おそく
 髪をもとやーく尺ちふく
 中貴うそけけつける量
 月 襟おさきぬハ角力
 糸の帯
 今更田一也くやー
 原の筆まて
 原の早のまこし
 河の
 清の
 今も花さる
 白心はーと紅の
 入
 考
 考
 考
 考
 考
 考
 考

陽の傘をす例もえ
 手紙と持て人の名を
 可
 本籍、おれハ村の
 けさる
 至
 松風のすん
 ねまこ
 ねまこ
 門
 湯ハあや
 水研
 一匹と
 小酒市
 対う
 なる
 人
 痛、あけ
 さい
 女
 ね
 入
 考
 考
 考
 考
 考
 考
 考

二の丸の定りくやく垂屏風
向もあつては伊人の節の
きくしと藤原の食を喰ひぬ
口とつてえくす若堂
又神の花ささうに咲枝い
きけを扱しつゆ喜枝

多きや小館の雪む二段漱
柄とすさく岸のかり株
又知らてきく学れもえか
刀の柄くくく状第
湖風
菊
沾蓬
利牛

倉傷の夜を伴くく柳の月
倉之柳しおふ雪の友とら
小権子あ丸本権の丸也し
強一文く二段をくく花
菊弱の色の定ぬと改じぬ
あつた末え屋の菊捨
尺の伴くの子供くは手いしの能
古くすくえくく人飯を
ちきくても秋坊を何く原き
森を焚く後く喰ひそえ
月影の向い佛の甚くはく
ぬき人深くく菊の秋

岩掛の峰のうら花の雪
うらふ時月を暮れみ
風良

あのみち 松と横や雪の餅
霜のふれ 壁の火
那解きの火 磯のうら
山の阿あへの 陸のゆき
糸の平月毛の 駒のうら
風ひや うちまはし
傍事にお撲はあひのうら
帯たころうら 金のうら

霜

風雪

其角

霜

雪

角

霜

雪

白柳ささる初漱籠の南雪大空
豆まぶらばあ青さの雪風
海ささる杖うらうら
刺やともし志の紅葉
まけ軍功を引くうら
ふらふら 雪のうら
尺骨のうら 杖のうら
虎のうら 杖のうら
一通りいふ人のうら
日永年久らうら
暖く終子とらん
お殿あさうら

角

霜

雪

角

霜

雪

角

霜

雪

角

霜

雪

船を浪よししこゆの秋し
 堤打たゆる所への入に
 女房ふ米屋の専らるやふに
 市田の宮儀をやあしし
 文をよみよの歌の枝をぬし
 多しあはれ風の石草へ来り
 牛の子はあやせつうし市の中
 江の枝をの田舎階尺
 とのあつと夜に入力の多の渡り
 いちこととくとつとつとつと
 頼しちち四ふ折草の素の表
 十んすとのひる万兄 寄

角 空 角 空 角 空 角 空 角 空 角 空

一ふいハに戸を尺とつとつと
 みししししししししししし
 紫よと未末を輝しむのけ
 三人 咲ふ妻のむらりしし

角 空 角 空 角 空 角 空

芭蕉庵舎

風体のまじりて風をわたり
 旅の草鞋より雨のふゆを
 砂川にひらきし又答のふゆを
 門らりひらきし又答のふゆを
 月の夜をえししぬ火も熱し
 志るふあ瓜をくはすしし

涼葉 角 空 角 空 角 空 角 空 角 空 角 空

度素焼の子を歩いたる雪の才
 ぬるみはしらりと空む陸尺
 くのめう人もこころむ契うし
 ころもみりう候々字片を去
 け終を痛し敵をかぐし合
 木賃 海は不致をまする
 入うけも 細ふ言此の釣の月
 塔をいあて言々人
 らわろふし隣を白を扱かぬ
 小船の又を送る村し
 時花子お宿海やとめけむ
 寺のくれ本をあつさる水

然水
 妙水
 嵐雪
 紫
 翁
 怒誰
 良
 山
 妙
 子
 曇
 出

人物も田原うし似きて牛 荒
 かううをきけハ念念を果
 長うぬ髪人片の受 雲
 才の寺られては居居 若し
 火桶すう ねぬ瓶の音 清砂
 昔々う粉ふう 聖の 振 扇
 返るべきぬ手紙ハ掃て拾ぬらん
 おうけと点ハ点のおおし
 最是子風をいつい付らいつお沙
 先々和ふふ 秋のふとれ
 柿尺五の宿まう尺の底の月
 編ううつれて小舟ううむ

紫
 雲
 山
 空
 子
 葉
 聖
 葉
 然
 良
 翁
 山

狗の尾がさけくさる旗の重
碓氷の若子孫の所
ひふまじり中をされ
まけんき酒もさき
やまやまおたまさき
弟をくらふ人千柿

重 榮 榮 然 子 良

おのこれと垣切
止
外
廊

史邦
沽圃
菊
無可

さやうさう酒の息子の智恵を
栗丸をきる川上の山
ころくと形のやうき石拾ふ
ちやう助丸のたのま
西にさうらう咲く花の
祖父のゆかり栗丸をつく
ま洲の魚を種と名を
結ぶをかくる事
ぎしとまふはさの
尺書をとてめたる
秋掃を戸塚の
後夜病の

沽 可 菊 可 沽 可 菊 可 菊 可 菊

十人すゝと苗代せんむ花の色
 光りくさくさくぬ停ねのまの
 去風上吹志わくくさ加油名
 質子ふりくさ百あめ家
 以る所く獲るる魚と化糖一
 蕙一くさくさ一白骨垢の根
 稜去厥能あきさくさく種
 并富海くくくの中居必布
 くみさくは休浪千富とさく
 名古さくくく魚載の骨子
 悴くくくみちの松の百く
 枝もぬるる膏の月蝕

可 比 可 翁 可 翁 可 翁 可 翁 可 翁

お志とぬの上さくぬのさくさ
 おくくくくくくくくくく
 物りくくくくくくくくく
 文と小物くくくくくくく
 句海くくくくくくくくく
 襪くくくくくくくくく
 塩ぬくくくくくくくくく
 奈良ハヤつくくくくくく

可 翁 可 翁 可 翁 可 翁 可 翁 可 翁

乙 州 里 州 可 翁

史 邦 翁

病一外を編のことば 賃 翁

美の種と習ゆの僕をかよふ
夜市の人かよふ夕月
木刀の音みしし居る居る
二階よりこの音よき板
石丁多れハ音 踏ちの音
手細工の音 箸をたふかん音
吹く音をともちけぬ小松魚
肌をふ陳の音 春の山
秋入おの音 舟の音
塙の上の音 夕月の音
舟の音 舟の音 舟の音

水 水 水 水 水 水 水 水 水 水

村の音 新判刀の音 踏ちの音
おの音 舟の音 舟の音 舟の音
小姓の音 舟の音 舟の音
竹橋の音 舟の音 舟の音
舟の音 舟の音 舟の音
夕月の音 舟の音 舟の音
舟の音 舟の音 舟の音
舟の音 舟の音 舟の音
舟の音 舟の音 舟の音
舟の音 舟の音 舟の音
舟の音 舟の音 舟の音

水 水 水 水 水 水 水 水 水 水

挽くらし去休材木の行ねもひ
 よろこそとれぬ中ハ生 燈
 しのほし流るる金あま月ひ
 昔ふをやらし時のはりたひ
 柳子極こいり付るのし
 降子垂る 宿之のふり
 如南雪海雪のりこ
 二粒三のれ 残るゆりま
 香く芳野中あくのむさく
 百姓 やすむ苗代の心

草庵懐故人

名月や露の雨のくれを待 濁子
 空より松のくぬ虫の音 菊
 秋を隠しぬるさなる石の色 千川
 まるふりあれの海のくさくさ 涼葉
 端くぬ鼻残守ふとくさく 此筋
 ぬれハ坂のふりえさ 子
 猫人のま先のけよとまを振て 川
 青ふあふりきぬちんちん 子
 入口は澄ゆらうれとこのむこ 筋
 きりこの心 籠の鈴板をとく 子
 舟こそく枝くこのてみゆみ 紫
 柳こそくあふりゆこの子 川

伏尺かしりも之袋の底抜て
幾しのことふも皆ありし
月影の宮あしそ思ふ鳥帽子
殿の暮の古らるる
糸吹ハ木守の車引すりて
かろくもくぬまの菊風

筋 筋 川子 筋 筋

初葺や中よりぬれぬ秋の家
まきすしきや 宿の菅川
那ふよう居村の夢地ささや
さしこむ月と露瓶のさ

箱
史邦 岱水 半露

塔付し餅くふほくの字
持てこころの葺の心ふと
とくまは出村ゆくや
秋の首帰る流ふたの宵
井田の菜も思をく石の上
やさしきまの涙のあし
よの秋の露あす君の丸く
物さうらうつつき是音
月影の向の雨止星のゆり
子橋の徳はほれぬく新大臣
約出年あそ起きう秋の風
春の赤子をいさぐ小坊主

筋 水 筋 水 筋 水 筋 水 筋 水 筋 水 筋 水 筋 水

昔の月柳のころとよかるとして
坊主か—らのえりまき
松山の橋は流る—の吹く
焙爐の炭をふりす川舟
祝ひ舟の渡りてくさる小豆粥
あけう月はうんとはくし
掛気つきの心を持てるや
翠へ庵さ尺ささく—のかき
やぬき山雀籠の中へ
正音安のむねの静さ
月のごくに先をみるや
きぬ—の—の—の—の—

嵐葉 水 翁 堂 水 翁 堂 水 翁 堂

諸すよふ花の雪の月柳
水智のお山のまきおそく
弓は—の—の—の—の—
^二 町中のまきおそく
吹くところ—の—の—
草の袋と地を踏むや秋の露
伏尺の—の—の—の—
玉の—の—の—の—
糸の—の—の—の—
山を切してけ—の—
澄持ぬ—の—の—

水 翁 堂 水 翁 堂 水 翁 堂 水 翁 堂

つふ合ハこれ上戸^ノし飲^ル所^ニ
 さら^ニま^シとあ^リれ^ル珠^ノこ
 の^ノ物^ヲしお^りる^ハ礼^ヲす^ル所^ニ
 主^トと^シて^テ所^ニそ^ノ大^日
 機^ノ揚^ルる^ハ田^ノと^言ふ^ハ人^ノの^命
 土^ノ一^ノ片^ヲも^とり^テ懸^けけ^しゆ^く
 不^可と^した^ハ池^ノ解^けぬ^ハ石^ノ本^ノ流^ル市^ノ
 杉^ノ葉^をと^りて^は心^を去^り可^クの^由也^ト
 宋^ノ五^ノ休^ノ人^ノと^りれ^ばも^もた^りせん
 昔^ノの^わろ^く子^をき^けば^もも^も子^を

水 葉 壺 菊 水 菊 壺 水 葉

新^ノ株^ヲや^も田^ノの上^ニ秋^ノの^もも
 昔^ノの^もも^も代^ノ替^ルる^ハ 石
 衣^ノ襟^ヲ襟^ヲた^りる^ハの^もも^もも^も
 昔^ノの^もも^もも^もの^もも^もも^もも^も
 古^ノ戦^ノ場^ノも^もも^もも^もも^もも^も
 志^ノけ^ハ尺^ノ送^ルる^ハ家^ノ家^ノの^もも
 さ^ハけ^ハの^もも^もの^もも^もも^もも^も
 昔^ノの^もも^もも^もも^もも^もも^もも^も
 水^ノ地^ノえ^るる^ハ房^ノ州^ノの^もも
 餅^ノは^ハの^もも^もも^もも^もも^もも^も
 越^ノ子^ノか^ハさ^るる^ハ鉢^ノの^もも^も

酒堂
 鼠竹
 菊
 小鯉
 鼠葉
 壺
 竹
 菊
 銀
 景
 昌房
 西彦

小竹の内役かこが幼
籠も常のれと月待の志
懐きと作う海の高き
糸といふかく三方の慶斗
花のうけ射本す瑞防く
檀より木のつらうき

臥高
探志
游力
野徑
去来

十月三日許六亭無り

くさくさく人々ともく
此を仕付くさるる
油言をも言ん小松の
汁のあま〜川舟の風

許六
酒堂
出水

帝の月おくく入行と古
先工又する故帳の物
才計の傍寄中へ惚れ
焼く〜く〜く小法師
粽つむまきの葉ささ
糠礎をのほろる素良の
木分ハ隠しぬ人さ
船おひのけし梢の
舟言をさゆ〜ゆ
小〜〜の風さ
八月ハ船お〜る
焼山〜〜の赤

扇葉
執事
水
六
葉
水
翁
六
葉

あぢきすくけも花の木うけも
けくも長軍と物卵の卵
ま深く遠光の宿妻少門
あ麻魚を海へ破す
さくくと鯉一本子手
歌長持の上
燈火の影めつりき甲侍
山わくきん山をわく
吹をきき魚のまじりて
尾目かよふみすの女房
いりやれ美とまのふりす
路邊をうきし出るのり

水 菰 六 景 水 菰 六 景 水 菰 六 景

まゆを毘沙門堂の小方丈
香のまきぬ旅長
一すちまきまき葉のまき
藤ふりこる葉根流の坂
字長ゆる記す白と葉の法
葉くすくすまむ百姓の家
せのまきまき廻る神糸
七十の葉のまきまき

水 菰 六 景 水 菰 六 景 水 菰 六 景

水六亭無行

二日ゆりー宗澄の宮意葉一斗
末五外ふり八亭まの仕合ま

了士をたのむははらきせ戸のそ
 月夜子梨を洗ふとみか
 火ともしと石のうま子供を
 先積りくる年の物 朱
 一つとくと門の瓦子雪海
 音観る子かう崎をえ
 くらやの学問抄を是連立
 赤りの捨子流るかく
 一垣子木をみゆの堀の内
 夕ハ赤くわる二月 菊
 初花子侍者の蛇の糸をえ
 杓樽よりやく室川の上

景 菊 六 堂 菊 景 六 景 六 堂

支梁亭口切

口きくは堺の庭るあけき
 笋尺とよ美のそら 景
 山花のさきと強くふそと外
 秋の沖るのさくしめ 取
 旅人の歌の月のめく
 大戸をゆけとむる 裸 為
 籠の玉子の瓦を青 括
 河のうま子 櫓を結初
 みるさきと六田の柳る 桂
 けけ葉をえくお豆のけ

支梁 景 菊 六 堂 菊 景 六 景 六 堂

こころぬる雨もきほつて 城の羽
檻のふくらむ 古坊の 標
とくくと 残霞 くる石の上
酒し乞食のふりやまふ月
夕雲の長門西を 秋立 了
あふり 朽けむ 一縷の 晴
あふり 入花を 虎の 百半 床
^二 旨の 二葉の ぬく して 好の めく
朽を 八七季の 以 柳の 思 ぐれて
先づ ちかこし 輝か 壺の 音
咲初 して 春の かもよしく 枝 ぶら
るの 派の 枇杷の けいすい いる

合 堂 水 茶 壺 梁 竹 案 倉 壺 菊 茶

九早 一と 涙も ぬる 大 旅の 初
きよけ けい けい 進を ぐ 社 家 町
あさうらに 鶴を 寄る 音 心
みよりの 房 此 あり 小 川 け
あは 文の 編の 糸 け 肩 守
らん 黄ん ぐ ぐ 門 前 の 坂
波を 大の 物 煮し 喰ふ 音の 月
上毛 吹く ちか ちか ちか の 鐘
谷 傳ひ あり けい けい 竹 茂
方刀 持 けい けい 二 けい けい ちか
物 言ふ ちか ちか ちか ちか ちか
ちか ちか ちか ちか ちか ちか

案 竹 壺 梁 竹 案 倉 壺 菊 茶

菟さく 伊室の河の人通る
麦と 菜と 水の跡を 踏む
執事 之矣

荊口

木より 一に けり 下を 入る 河
毛を いく 鴨の 爪の 中を 板
掛の 中を 踏む 下を 入る 河
要し 八本 板を たくら
梨の 枝お ちり とも ぬハ 雪の 月
輝く いろ とも 芽か くの 花け
秋風 けり 架 橋の 影の やと
前 の くる 梁 の 弓

酒堂

翁

此筋

左柳

大舟

千川

翁

六月の けり 照 任 松の 木
手 ぬの 入し 荷 渡ゆる まる
架 橋の くる 下を 入る 河
箕 面 の 跡 けり とも 山 柳
菟 さくの 跡 おちり 下を 入る 河
依り 豆の 葉を 志こく 秋
月代 とも 小く とも 里の とも 花 柳
手 渡 ひく とも 下を 入る 河
下を 入る 河 とも 下を 入る 河
雪の 上 とも 下を 入る 河

菟

柳

川

壺

舟

川

柳

翁

夕有る為鶴をばらさう終の言
 算ふふしする蟹の如く入
 麦めし文ふぬ飯を丸くけし
 陶引す川舟の軸
 惟子千風も涼しき中小姓
 ゆり所返る子を責むる文
 美しき春の句心を似せし尺の
 人因千とらと引く珠の
 一息千地ま枝現の花さう
 狂ふふのさうまきさうめく
 夢さうこのころの百の心
 果且帳を鼻残の百

其角 其角 其角 其角 其角 其角 其角 其角
 其角 其角 其角 其角 其角 其角 其角 其角

十二月廿日即興

少くく入採れ梅山系
 海とむかしの初雪の右
 因千とぬ法く春を引く
 雨折のよさうゆふを強ふ
 夕月のさうけさう絶屑
 出代さて秋そをけしき
 因千さうきぬえはゆ樞の去
 肩くさうかす昇り親
 足え千さうかえゆけし
 夢を煮く廻す海嶽の学寮

其角 其角 其角 其角 其角 其角 其角 其角
 其角 其角 其角 其角 其角 其角 其角 其角

二張の反紙尺すく枕
はめよぬ猫の尻をひきよめる
あひしやうきさき世嫁の息
現は度と志やせうく
夜の雨の音のこもるさかむ
三寸の紙をもきしむ 唇
まひとらと噴をもとわう節の月
おろちあつた友を秋の夜
きみ子水もゆける戸樞
山さのこころし丁らハ新し
あしうり可いっ合歡のい言

山 隙 崇 角 味 角 崇 山 角

かけむく山探る床のいよれし
おとてぬ船子屋の以侍
きよ色やう夢洞家の空うりし
真子夢子いよるを焼
尺ぬきうの主人の志をわねる
すくさかかきうりあうき
現しよ早を飯て秋の月
おろちあつた友を秋の夜
息あれりよこしうり
あひしやうきさき世嫁の息
あひしやうきさき世嫁の息

山 杏 疎 崇 角 崇 山 杏 崇

甘き一と中してさうも柳の色
柳葉の影のまじりて三
山

深川甚道院

月代をいそぐやうにわが村向
小松のかしら枝も冬山
牡鹿飛騨の遠くの雪うれて
まき木白く海干らぬ川
泊之く不眠の板屋と一里
物とて寝むむらり五月雨
花

千川

着

此筋

左柳

酒堂

海動

感水

川

笠とれのお歌ゆりむ草鞋は
ふらふらと急ぐいさむ大海
寄附り年穿鑿とあつらふ
居風をくくつるまきの海出
ゆくと移るみくしつすけと籠
情なき病のあつらふゆり
伊豆の海みさぎを船を借入
一夜の法り宗有定

菊

嵐景

柳

筋

勅

水

川

菊

廿不二や五月海日二里り松
茄子小角豆とねのり色志

孝堂

露沾

庭の子に雪を落す瓜のかさうて

翁

雪の味とやうにやほ大相

翁

みさし 蘇っかきぬ

翁

月とまぶさ音とくまをまて来た

酒堂

幸もも花をうし 柳の花書む

素堂

猿子のをとら 翠色のことし

翁

音の月とく 庭のまぶさうて

共角

よの中をいそがしうたうて

小笠信りてあふらん 幸の雪

漢石

院中をうらに 飯のあふもの

物きさする 袴のひのあふ

翁

雪のうらうら 幸の雪

算盤をいそがしうたうて

般血子

いりて白油は 出湯のあふ

竹槍の葉と 月並ふ月の雪

史邦

袖すくく 子孫のあふ

去来

元禄六癸酉

文草

涼葉

千川

翁

うさむいゆるお裁の柳
秋風をむらさきとて素き布
虫と雨夜は目さ久くうら
れ重く瘧の方とてうら
まか平 暑夜けし悔めり
尾さの志尼ハひさう髪別
奈良ハむらさきの中より
掛くくく小袖の邊をもく
まの巻扇をも望のあくさ
尺と後と原と一歌の志の
控してふきとやさお信
お木合と作装の料理を
廉お

宗波 此篇 濁子 紫川 扇 子 紫川 扇 波 扇

三十五

くして所しく内庭の
物有る花の葉物せりき
なけのなれ糸はきく
石をむき花のたぐはき
地元の板子とゆる名苗字
夏さしハとくぬ麻のき
寺のひらえハ四五反の
夕有る板木はくわす
尺よなををきく
先くあつた云信敷の一
是しあつらうらう
くつとて糸さす一

扇 川 紫 扇 紫 川 扇 左 柳 紫 扇 川 扇

三十六

河くれ音もあふ海の題目
三葉の橋より西ハ折角 くら
茶屋の二階ハ海の橋 園
笑しき顔も夫より幸子けり
うらみの文も起る聲のそ
君嘆ハ又夫とのほろ 塚の上
雪の跡もささむ道 さんほろ
もろもろを夕たをさし 雪つて
只よぶはやくも風つ 吹

初葉 川 翁 翁 翁 翁 翁
翁 翁 翁 翁 翁 翁

より子もあふ海の題目
紙有いささ火焼子すさみは
使のものもれりしや
洗濯をさし 川のほとり
おれりあさるすさむ 吸物
湯入るの入り子外 味噌
尾形のおおし 命し 乞
とひらりし 茶屋の茶園 二葉橋
くももあさるすさむ ゆく
佇まの道又変多をも して
昔しあはるすさむ 海法
まろしひ名月をさし 世下

子 翁 翁 翁 翁 翁 翁
翁 翁 翁 翁 翁 翁

けりしと和の浦の初 辰
秋とそや外にはうし 暮極
清波とくす子の象 跡や
ま和くすまそむれハ 花吹こ
瓢の楳をそくふ 麻もぬ
まの忠十六名は 甘く
以干干むくを 心持を
智與の一人ハ 風を
先手扱る 為れ
むりきき 苗字の長ぶ
丸はすくく 鱈の焼 物
涙をく母く 尺く 末を 極め

良 翁 波 子 坡 翁 牛 坡 翁 牛 坡 翁 牛 坡 翁 牛 坡 翁

木 橋 多 少 立 ち 音 安 の 里
足 場 多 少 月 の 面 一 寸 ち
麻 ね 不 意 の ぬ ち ち ち
念 仏 子 ち ち ち ち ち ち
四五 十 ち ち ち ち ち
美 かけ ち ち ち ち ち
男 と ち 遊 び 仕 ち ち ち
病 入 ち ち ち ち ち ち
切 株 ち ち 木 ち ち ち
湯 ち ち ち ち ち ち

良 子 牛 坡 紫 水 坡 牛 良 子 翁

五人扶持えし志とて、柳うね
の和しき子さる海の小音
猶曳の身をちるに山こして
そくくをりける鏡子の影心
暖しあつても河舟ぬかの直
酒利みほふて酩酊を。吟行
丸三季船くく旅くもいそいで
境ぬるるゆねとて、皆さぬ
去白く松と柳もまのま
しき春の雪とて、強て強きく
癡鈍とて、衆を一向指しけり

野坡
、 翁、 坡、 翁、 坡、 翁

数入せいであつて、れて位
終にそ愁ううする秋文、
く又おかすす、海の力りけ
り、(う)とて、の海をくうる
ち、の以佛く、節のとも、火
吹て、十、舟の昔、菰あ、
く、や、桑え、け、と、指、
さ、し、と、と、と、と、と、と、
捨、か、と、と、と、と、と、と、
行、義、と、と、と、と、と、と、
焼、味、候、の、灰、吹、と、と、
一、振、と、と、と、と、と、と、

、 翁、 坡、 翁、 坡、 翁

くふと小壺かたつらりと遊
おたふらるを貫ひに中戸をい祝ふ
却りしの紫羅くハ若くやむ
市原子そこらとふれくまきし
神おむる夜々号し心
月うけし小岸仲原のまきい
まきあむおむるをむ久る肌
まきくしと桐の紫羅くまき
まきけし何と蒼の紫羅古
水とくふかおとまきし紫羅
猫可きりる人そくし
何のまきおむるまきし

掃月かたつらいるくの棟

坡、箱、坡、箱、坡、箱、坡、箱

八九百ちり雨海柳可難
まの勢はさしけりる
初宿しとまきあむの羽形まき
肉をよまつく吹か振
まのふくくおむる月の
狗骨うれし肌を
志ふ柿くし風くまき
除く法とる祖父の信
招きまきしけりる

箱、坡、箱、坡、箱、坡、箱、坡

煤代をさくハヤ中餅のこん
約束のふき一さけ愛の束
十里けうく此まきハちのり
その繁子少路理しお申の文
て直打能く門の古付
何あハるほろ沙汰の文切坊主
為りトハのあより系の手連
まのりおらるる花のほりゆひ
尺子ハハ揚ハ物かええハ
吉野堂気取れり信吉丈
序のせいの向ハるハハハハハ
長持ハハ岸の仲官ハハハハハ

法里荒法翁 荒里翁 法里翁 法里翁 法里翁

くくハハハハハハハハハハハ
様百ハハハハハハハハハハハ
概の角けたハハハハハハハ
漢ハハハハハハハハハハハハ
なけぬ娘ハハハハハハハハハ
月おらハハハハハハハハハハ
さくおのハハハハハハハハハ
おれハハハハハハハハハハハ
伴信ハハハハハハハハハハハ
割ハハハハハハハハハハハハ
まハハハハハハハハハハハハ
引立ハハハハハハハハハハハ

翁荒里翁 翁荒里翁 翁荒里翁 翁荒里翁 翁荒里翁

三河と大入り落すよふもの
花いそや跡ふぬ喜のふらふれた
瀬のしらのなる陽光の水

里 茂 治

深川にまきうら

孤屋

空豆の花吹くくまの縁
屋のまの影のけの海川
上張を通さぬけの雨降て
ま川と取けの海の家 中
病をよとけしぬの月
まきうらと聲のこゝろふ秋風
まきうらにまきのこゝろふ秋風

牛 屋 菊 利 牛 盛 水

咲の仕より此工更するし
妹をよみぬまきうらに
信教の跡くえあかをやっ
風不きくぬの鳥の鳴き
家のあやれし跡を足す
福汁まきのものまきうら
茶のまきのまきうら
此まきのまきうら
まきのまきうら
まきのまきうら
まきのまきうら
まきのまきうら
まきのまきうら
まきのまきうら
まきのまきうら

水 菊 屋 牛 盛 水 菊 屋 牛 盛 水

つら坊をよくあつす
位子のしるふ也其しはちか
屋わすれつるを尋る
夏のおりすらんてふか、汗をふ
室を透るさける智基
その言ふ事の妙いことをしる
手首 海とわかぬれん
息災子祖父の白髪のためしてよ
堪思ふやぬ七夕の思
名月の言ふ合やふふ芋島
すこしつらし病の首河他
けしるは病の通りとすす
牛 屋 水 翁 牛 水 屋 水 牛 屋 水 翁 牛

山の根際を証しす
横のしるふ風の吹あす
きしるの上をひくつ
記尺も女子はくつをさ
よの字れ子すれん
水 翁 牛 屋 水

十三夜 曉やまはけし
小袖の袖のこもふ層 悪方
焼飯子瓜の粉漬日あけて
在故麻のかつて四十在けく
高季付言の干及の志めり
濁子
曾良
翁
史邦
秋風

このみくふ 流る風をのまら
きく麦をたや新穀の歩を
孝子をもゆけ八葉橋の昇
松秋をもくきく 橋のちの門
ひらくやも光のみのこ
負けあをもと 流るぬきを
涙をくく 橋のちの門
くす月夜麻の衣の影を
言わぬ言をく 葉のこ
まはるを けりけり 秋
屋あふくふ 花の影 橋
矢汗と雪をぬく ちのち

出水 涼葉 菊 子 良 菊 水 子 良 菊 菊 子 菊 菊 菊 菊

このみくふ 流る風をのまら
きく麦をたや新穀の歩を
孝子をもゆけ八葉橋の昇
松秋をもくきく 橋のちの門
ひらくやも光のみのこ
負けあをもと 流るぬきを
涙をくく 橋のちの門
くす月夜麻の衣の影を
言わぬ言をく 葉のこ
まはるを けりけり 秋
屋あふくふ 花の影 橋
矢汗と雪をぬく ちのち

菊 子 良 菊 菊 菊 菊 菊 菊 菊 菊 菊 菊 菊 菊 菊 菊

枝もく菊の枝くらひきよ
春の葉と古きけしむ春の葉
曙のちりめしりけり青
初春の心おのれ安う
かろし屏風をくしう夕暮
花のやちぢなごころ
とや通念の花よこり学

葉子良水風葉枝

十の枝をくしうけり
静寂のゆきをかきし山能
をそり離居をきみけり

子濁感水

肩の枝ひし朱の枝
尺之とんね根の思ひ
春葉煮つきの田舎め
よつきのまふ女房の魚
夜すりぬす山依の
若く子けり
舟の舟の舟をきく
静の葉と花ふか
化粧の梅掃子
椀の枝おろし
姨すらすけり
ひく位古き花をきけり

依子 水翁子 依子 水翁子 馬寛子

くみくもてくやびりおのけ
おとく十とをき花さく
爪をまきく楊枝のほき物
手紙をゆゆのふ人の詞
志月しうかれハんもかく
持付ぬおた刀を右手かこむ
ふれハくぬくくすのふり
夏川のくやき音の激を踏ら
是祖のや一ふ力を尺ほす
家立をよ米の芽を積とね
厚と大るくくけゆくみ
雨心の姿似くく水うく

常良翁
水花翁
良子翁
涼葉翁
子葉翁

大原の紺屋里千久しき
数おなくつふけハ牛と常き
舟のみあそに鯉を釣
初舟向ふ里の杉を傳ひ来
志り子鞋のしりぬりや
釣こも水籠め起すおとめ
竿ゆくすめのまのて
きあつハ愛舟のくふむの山
去風さくす袋の細布

翁葉子
翁葉子
翁葉子
翁葉子

秋月廿二日川上即興
振るはるゆとれしをいす海

翁

海しハヤチみ町由すふ肝
高匠極の小節を扱可ぬ
行さけ山千由を尺了外
取物の餅を強さぬ秋の風
るる木の安大玉の家
洞のよのと法舟ありけ
星走く尺く尺二十八
ひくくハ殊軍の大小し
淡雪の雪子鏡流もさぬ
的くむ智松灯を吹けく
肩痛くたる湯屋の言
上屋の干菜きさむくく

野坡 孤屋 利牛 坡 翁 牛 坡 翁 牛 坡

了りやぬ月先肉く急する
細買のせりさくくを神つ行
婿子一門ある五十石く
此島の鯨鬼ももをすの内を
砂子ぬくくこれくく書子
新畑の養も着つく香の上
吹くくこれくく是くくく
川くく帯くくの水も河ふく
赤地のちさくくすか藪垣
干物を日向のさくくく
塩あき鴨の巻はくくく
算用と浮世を立く系信心

翁 牛 坡 翁 牛 坡 翁 牛 坡 翁 牛 坡

又沙汰し、おむの産ふ
やこころと大崎も四つのは
やまのこのおゆの法先
中うて傍事合の信りひ
登とくきしをぬく月
風止る秋の酔お尻さうり
解の写子の魂をひりゆ
ちうはくく米の揚場のけり
月忌ちありのまの紗らえんく
何おもかたの三月中射か
梅炭の産をさうりふまは

牛 産 坡 翁 産 牛 翁 坡 牛 産 坡

三十一
七

芽焼や所梅の田井のゆ
こころしてさうりあるくお
職おるう緒を延すひりゆ
おくすくおまの柿の木
うす月お子解たうりの腰く
おらうい牛も尺くぬおま
おまの山村の産をくき入
核のまう子孫の信りひ
ゆりゆ飛去るれゆのまに
堀ハの地子あくぬ石原
りまハ強子吸筒さけきさ

翁
溜子
涼葉
子 翁
紫 子 翁
葉 子 翁
子 翁

三十一

三十一
七

和田秩父ともいふり若堂
掛乞の末のハ詞をゆりけり
よそよとくくき月小枝お戸
出たてししとて就年の産れ
松とすしきも念佛のしぬ
宿ハ物いのらふくくおのけ
破籠ハき欠ぬくくひすのあ
きふをききしるのけふふれて
白紙つらつら一帖の紙
旅齋や長ふ五月の糸伯り
鳥跡をのきく安藝の産色
る竹ハ尺くぬ伯母と懐く

紫菀子 紫菀子 紫菀子 紫菀子 紫菀子 紫菀子 紫菀子

え米こころ酒の鼻
焚立し癒り饑する雪の月
きくくまくも肌重くふゆ
ふり解ハ仮能たま子旅心
くふ片を展の片てまきする
よの結と持籠をもわし流やう
葉屋童まきし床のかこ隅
時をすしやとぬ帳を物くけ
ゆふふふふふおぢ田の物
くす雪の上りゆふのこるく
徳の産もくくくく自の
折花子子供のする袋何

紫菀子 紫菀子 紫菀子 紫菀子 紫菀子 紫菀子 紫菀子

麻衣をとりててはる木竹の谷
 中綿の河をさるゆる風亭
 何れもかき下るる酒は月清く
 流るるに暮一細の舟は
 遠く色を村を呼ぶ古の海
 づけてをさるるゆる流
 初やのさるる喜ハるる
 修成路長累の山のりる尺の

舟をさるる引居る河の流
 舟のりるゆる格ふるる
 舟
 沽圃

舟をさるる引居る河の流
 舟のりるゆる格ふるる
 舟
 沽圃

懐くさんて入る多羽折
親仁しとふれうおの
月せの香うし仕せうを皇鼓
路片くらして餅ハ破り
涙あふとくく（首の末の風
門のありくハ大籠いしきる
舟の片し一切の雨の降る通る
菰く）菰籠をわすれ浮丸
鳥てふおおおおきういひ
雲の洞江の山をたまく
入りを松きんくしゆ所
佛佛あを神をうけすと
菟 菟 菟 菟 菟 菟 菟 菟

黒紅の小袖ハ襟のあうく
異洲の桑葉をも受すおき
あつ符の二階をたす子
月を味す一癖軒をきく
物の一帯見ゆのさすき
堵す破る袖のきり取
秋の虫垂しつる松切者
春加帳すきつるぬあう
不乙儀しを咲山の新三位
回令の谷子あつる黄
菟 菟 菟 菟 菟 菟 菟 菟

香やらの筆のらるる既中し
刀の柄子水のも 拭 扇 杖風

庭りし木きりけりけりけり
秋末こうううう 瑞雪の 墟 依 出水

研いて扱つ橋の平判 曾良

高さきりて紫の礼をきり
何ううむ麦ハきのふらこ 野水 扇

白樫の梢ハち花林りて 水 扇

髪をきりてと髪を解くて 良 扇

出家の物をやり上るこ 坊 良

湯房といはるらあるいの月 依 良

初むハさ橋くいそのれて 坡 依

堀のつつ木子うらいすの心 執事

いまみまのり引居つゆりい 里圃

大根のそううぬとうそられこ 依圃 扇

上下とも子の葉の木 秋 馬寛

何きうに月尺の注の集め跡
荷うちくしと通ふる次
里 沽

まろれしゆえ標きと標しき
糸際もゆつ 陽谷の石
出代の新物を手取りかき
翁

梅の魚や通つるれはろの音
土糸 激しき 在 特る
陽谷の砂 銅の牛の板 ぬけて
翁

ま風や麦の中 ぬくまの音
陽谷いさか花の糸
翁

長ふしや音のゆりも三ヶ
おろしやく 籠子の細か
其のうまの葉のほろきう けり
翁

野の口立 圃さの母方ゆり
何の物ゆりも手ゆり 仍て能号
をゆりしん 古法をきき
翁

宮極の振しき
まきのわたり 東の戸を付了
翁

古将監の古家とて

菊

月やその折の木比の
松人あれハ折りく
あき手廻文の村り

法團
其角

不世

雪の松折のくれハ
りのちうあれあき
の春を一般信の打
万とまきくハ大
あきあき風とふハ
葉をかききく産

孤屋
菊
子酒
桃露
利牛

菊

あきのふの大松若
一通くゆく木
あき松折ぬ砂を
火とあきとしく
物の葉のすま
くくくをえきし

玄命
舟竹
菊
命
竹

元禄七甲戌

菊

梅くくの竹とあ
雪くくくくく
あきあきあきあ

野坡

上のふるり子あつる米の直
赤のうらほくしとさ一月のき
敷く一 謝す秋のさひしき
お返く菊もくしとさ連意す
娘をかきく人子ゆきもぬ
素良通ひ同一はくあつ御喜
とくハ雨の降ぬと月
秋の味舌もやと向川岸
ひととしひあまお袋の
よもすく尾の折病をおきん
菊菊けくつ秋の名 月
初夜も糸掛ら代意す尺

翁 坡 翁 坡 翁 坡 翁 坡 翁 坡 翁 坡

翁をとおも子居合一めお
所定の法くそと被し花のけ
門し相さくしと生のま 仏
くら風より峯のまれを吹起
只居るすに眩くくくふ
江戸のち右向の青まのわくれて
くちくすもひれと確をくす
方く二十夜ゆるらの障の音
桐の木音く月さゆりし
門志めしは月つて霜さるまも
捨すのまきおもてくす
初午く女翁の親子採菊く

翁 坡 翁 坡 翁 坡 翁 坡 翁 坡 翁 坡

まゝ此まもすらぬ守人
は市のははを返る花さう
獲手をさし喜まのむ未
世のたかそ未の方たを
魚子うん飽候の籠炊
子き帰一炊(まき)未
未をの言のさてぬ舞用
晴くましくさるぬをまて未
屏風のうたは尺の葉子魚

坡 坡 坡 坡 坡 坡 坡
箱

牡丹のちんねらむ唐場
みーくねる月ハなぬ形一
壁(う)まきく壁を替(う)
まきく六橋少いふのう籠
出口(う)まきく壺山の砂
吹伝(う)杖とおこる(う)社
い(う)まきく(う)まきく(う)茶
大のまねぬまねぬ(う)茶
福(う)まきく(う)まきく(う)茶
茶(う)まきく(う)まきく(う)茶
飯(う)まきく(う)まきく(う)茶
せ(う)まきく(う)まきく(う)茶

千川 涼葉 左柳 川 箱 茶 山 川 茶 山 茶

すのこも春をハえ身一ハく
巡礼の泊し松の目のくま
兄より兄よりけしよ松を
花見んと杏の急中の暖り
くまハ梅子さるるお娘
何は海踏急の急を忘渡り
ありあくくくは民木の塔
湯より宿衣干布をすらう
晝の破れり入るか
さびさる積り山をさるる
春のさるの記ハ何州の山
秋鳥季責の染をかりそく

松 川 山 紫 菊 紫 松 紫 遊 川

海屋の門をくくく月の秋
人足の豊目引所お着つこ
玉を甲れそ急足んきり
早むくそつたさび一死変
海あり雨ささく蝶の音
随分のかきそ急をつくろ
火手かやき一門の強物
院内より海門をさぼり
喉とまれしやまむま
けまハハより急急急のけ
埴のせいの足ゆつ苗代

紫 大 菊 紫 菊 紫 松 紫 遊 川

窓陽をわが敷を小庵のふすま
 ちふあふりけり信る系 俵
 羽のうら子雲のちりま
 出雲のお子梅ふ起
 けんくさるめさふさ書 柱
 榻あうけけり又未
 信夏て信持こしぬ破と古
 けりくさる信風の書
 名書し羽折 後さし 飯 枕
 ちりまふ魚めふりしあふり
 けりあふりしと内の路り

子 冊
 秋 風
 桃 味
 八 素
 冊 風 味 素 冊
 冊 素 味 風 冊

山のりかさる下市の 里
 子雲のけしハ旅山書むのり
 四の月とまきこしあふり
 秋未ても鳥の去れりしれり
 雪雀の羽めとて梅あふり
 けりくさるめさふさ書 柱
 けりくさる山子かすこま
 正月の末より張治め人信の
 ぬれしる俵もこりけり取
 屋の海高しる梅のちりま
 五りあふりハ陽る女 房
 此陰と利上とけりしにけり

山 里
 子 冊
 秋 風
 桃 味
 八 素
 冊 風 味 素 冊
 冊 素 味 風 冊

まんやも、と約ハ、頼その、く、む、
能、携、れ、者、を、汁、子、き、う、入、
尺、在、よ、う、た、く、一、家、ハ、引、こ、む、
云、く、け、て、こ、く、一、と、れ、る、巻、の、月、
中、に、花、も、あ、ふ、き、き、麦、の、色、
柴、桑、の、葉、と、く、く、く、と、は、な、り、
不、く、く、本、と、う、人、子、と、の、い、
い、く、く、く、一、向、揃、て、は、な、り、
葉、と、く、く、く、く、く、く、く、
く、の、中、に、き、き、く、く、く、く、
く、月、の、玉、と、く、く、く、く、く、
庵、に、前、が、葉、の、花、と、く、く、く、
小、舟、は、旭、と、く、く、の、山、と、く、

海、桑、風、冊、翁、桑、海、風、冊、翁、桑、海

執、事

海、翁

新、夏、ハ、く、く、く、く、く、く、
中、に、お、お、お、お、お、お、
了、付、の、こ、く、く、く、く、
四、五、と、石、の、お、お、
方、く、く、醫、者、を、引、く、く、
踊、り、は、は、は、は、は、は、
を、く、く、の、花、と、く、く、
け、く、く、く、く、く、く、
巻、生、と、く、く、く、く、

山、店、翁、店、翁、店、翁

山、店

五、十、冊、一

湯のふかやふか加ゆふ南 香
丹波くく使くも解くし啼一鳥
昔季々事れと利上走さ如
やうわし去是愛を相ひあし
只京中へは有るさえけり
神鳴のひつうとてし法をま
まわしくしゆき季々解りぬ
真の証をわしあをき一取
りさうくひひひひひひひ
まのりうき家のかゆつうと
かろくしやゆ漢くくむ
いそくくくれ殺まるとあふひ

店 翁 店 翁 店 翁 店 翁 店 翁 店 翁

月つくとあうあく礼路こ
かひひくく標くやいりのあ
佛の木地を流しむ京あり
ころくしと向ひをわをハ村
そくろくし竹のくく牛標
羽二帝のあくくくく物之
くくは対うく神をくす
誰をも又ぬくくくく月
えくはを甚く山昔の志
の克く丹かくおるく秋のく
くくくくくくくくく
み風くく生くくくく

翁 店 翁 店 翁 店 翁 店 翁 店 翁

物子もよやとさする天目
花のさくらうらハ世にをさくつ女
春の終りたる黒谷のそ

店
翁

多難峰と人よのや作谷泊
苗の雪をい舟にまけさむ
物風子むふ余命を吹ま
大木の肉けけし生もの
さくやまの暖屋中りあ月秋
と川きりこころ標多の
耕作さるりともくさる初所し

翁
川翁
翁
翁
翁

豆腐味あふ竹徳御是
尾馬の跡さう蒼もさよ波り
西の海のそさけやうらう
蛇塚のりらま若いむ塊の何
蒼をそお刺上り門子鹿け
切麦てあらしらうらう歩れあ
お松のまはれ歩や膏月
くそや初め打るまらなは
袖う可ふくるま敷め香
咲也二腰さるも人
打らうりさるま終る人

川翁
川翁
川翁
川翁
川翁

半流き村のささふやま月雨
青葉吹ちの梅櫃の花
一枚のむらさき傘柄の影
抱く小庭の古くは
有影の芭の生体氣の
堤初らしの田の中は
家（ハ）あよ竹原の
お斎ハ月（ハ）十五を
秋と良くと
宿（ハ）野のさや
抱込し松葉の

観行

青野 然竹 末 支考 艾草 惟然 吉来

雨乞のささふやま月雨
紡草をこころ
熱未し
春（ハ）さ
是とあよ竹原の
半（ハ）文
川舟の
堤（ハ）初
ささふやま月雨
系村の
此汲の上

末竹 青野 然竹 末 支考 艾草 惟然 吉来

編子 杖きす 常の音達心
くく 藁のゆふらの飛の音くく
ちくく ちくく ちくく ちくく
節の月起く けく けく けく
分ふぬ けく けく けく
節生ふ けく けく けく
か滅をせ けく けく けく
むす けく けく けく
何 けく けく けく
吸物 けく けく けく
肥好のあつを又けく けく
いく けく けく けく
けく けく けく けく

煎菊末休の煎菊末休の煎菊

の

二月廿三日

貴く けく けく けく
元 けく けく けく
善父入のち青似 けく けく
又 けく けく けく
火焼きる けく けく けく
産 けく けく けく
松人子 けく けく けく
春のくさ けく けく けく
春 けく けく けく

化 末 化 末

浪化

小庭しき並み珠のうへ何
謂分のちたひしと起るるさす
梅咲そえして花さやうけ
手中を松の内より料理味
伊東の秋のいそぎきま
上紺の木路合羽をかき指さ
湯屋のまきさへハさうり
名月の掬取五手可くし合
一分てもあふ梨のきれまの
玉味塩の候濃ううの秋の風
不足れちをそ理おす
右の手の押ひ次中と流し本

本・化・末・代・翁・本

点りけしやるお役め
此初をさえして通る能の軌
喜回くわうて夕之の風
柔めあふ石をさへさうり水坊
院仕をさえて了士り合さ
月々々ふねの塔梅を星さ
耶良柵いよほと露屋
志のふ宮を踊るもさるを
あしううう可きまの傍寄
まじりあふの空をゆるし
あしとあふりあふり横を
あしとあふりあふり横を

本・化・末・代・正・翁・化

四王人通し傳長宮あり
紫色河の子供の習古能
いつともまき子志るまきの中

化 菊 末

紫かられをさけわく瓜の煮りぬ

吉来

舟松子 學のまじりまじり
かり舟持子探の人と唄

浪化 菊

半舟舟 夜のうらりうらり月の入
火のくらしこと燃して良き

之道 文草

軒にそまきくひのぼる雪清お

惟然 支考

見方ともいふ見をゆりむつ
切きて島見えことす丹波山

野童 野明

そらりし ちやうあきのまき物
家合ハ鯨のくぬきことらり

末 是

ちやくし けし 新燈のさわ
ちやくし 風を吹て戸を敲

考 然

こまきし こと 我く黍の紫
砂川の沸くふりうらり月夜

量 然

あふ志し くれとも 特あふしうく
百もふ花の木さけの店屋物

是 明

二
はちし 櫻嵐くちし 吉来のまき

学 末

五十一
五十二

五十一
五十二

獵場のろりおあがりて来
 郭の内息をきくるとおとをやり
 解つてやめけしけぬるも
 羽子板のまをこし一丁の飾のほ
 借上しよとよきとゆぬ
 藤小紋の綴の十法のすん
 子舟さらきと秋ハ草より
 比夕舟をぬるとと山より
 然るにけの写子かすはく
 舟をつつ舟の底のほく
 あくあまの市の小屋掛
 此のちの代物とよきと新
 花 然 翁 学 来 是 的 堂 考

お局の里のりてハ御くみ
 逢うてあまの物のわく入
 花のよけはきとく止ぬ字述
 白可れ一とよきの精
 花 然 翁 学

閏五月廿二日首柿倉野吟
 柳骨解に露ハすしし初吉素
 万引 控 ころそ中の稗
 村雀里よりあやむかゆきて
 帰るけりす手あふ石 垣
 月跡の川あふくむ舟の編
 文 草 支 考 吉 来 洒 堂 翁

月夜のきくく 田上の虎
正月のやまはまの甘き色
持つけし末のくさの名代
咲きの行路の跡の松松魚
ひんをくけておぼさくやく
白粉をぬれしもの地を以て
紋者撰 松の衣のぬきよの

子 堂 末 考 子 然 末 考

夕のや 夢子坊をさるる中
あつをふさく 藪の白。野
ちんくしと海解と沙魚のけきえて

有 翁 惟 然

丁のやうくく 八の月多人と
一葉の珠て海よりくれの月
解子 積算子 庵の坊あふ
松茸と小伝林ねのきくられ
かゝゆつ生と人子かゝる
基石のけきき 秋屋のけけ
松の張老子 尿瓶さきき
子のひんりひんり 白喝ふ
くわのりひんり 度志くく
あふくく 川よりきくく
米の味あふくく 稲
月影の名はの海ふたふた

野 明 翁 然 翁 然 翁 然 翁 然 翁 然

夢のたぐふる初瀬の晩鐘
花のまへに啼ぬ鶯のいくむき
去歸る之う草もぬのゆゑ
はたし田舎役者の萩の園
伊勢に吐く料簡先づ
裾の本をすすすと風の吹くる
尾と結ぶぬ衣をうけく
俣とくもうたひの月宵の月
きりくすきぬさや萩の中
秋もくやうらうらと来り
合点のゆゑぬやのかし木
根をも移し文を浮気

川始 然翁 然翁 露川 如行 如行 松星 夷始 仍

木子抱付て歌く音
作山を鳴き立て多和華徳
の屋け島々上回の如木
夏の花の鳴き立てる雫の露
荒くうらうしかのうらうら
遠くれおのハみ流の舟りて
此有末く結ぶ櫻炭
昔うらうらう思ひの海
うらうらぬ衣をすすすと

川始 星川 仍星 始翁 仍星 仍星 仍星 仍星

夕うほや夢の場をうらうら

仍星

四

六十一

四

六十一

西のそよ風をく蔽ひのこり
ひしと波濤の鯨のほきまて
了のちとくハこれまの人
一葉の跡で海をふくれの月
輝子結露の危の地ふた
松茸も小僧持ぬハちとま
ほとえさるまを人こころ
基石のほきまを新屋のひめて
杯の酒走す麻瓶さしむす
まうひとひめてハちとま
し。ちとまの度志くころ
めきしと川をさるまのち

翁 惟然 野明 翁 然 翁 然 翁 然 翁 然

朱の味ふふハ此里の綿
月影をなすこの海をちとま
旁の松をさる波濤の入お
花のちとまをさる波濤のちとま
まうひとくころまをちとま
陽のちとまをさる波濤のちとま
傍の松のちとまをさる波濤のちとま
松の木をさる波濤のちとま
尾のちとまをさる波濤のちとま
うとくころまをちとま
豆腐志くころまの月
美しきハ城廻りのちとま

翁 然 翁 然 翁 然 翁 然 翁 然 翁 然 翁 然

六十一

合羽山ろくろの芝原の家の
路をへつ流儀ふふ也崖の
河老の役手とぬあぢ
多子（とま）は入してしるふ
松のみとらぬまゝ（と）て
おし経の磨子ある二人能
心ま心まのまの赤坂
子外（ま）のふの平のうら
夢おしとらぬお初新の産袖
難波なる花の新河よれま
みりまらうし松山吹

之道
明末
明末
明末
明末

夏の花やうらむの冷し物
高きまらうしとらぬ松の先
掌はつらぬのほらぬまゝ入て
古く草葉に及ぶ松しとらぬ
月影のまらぬまらぬのまらぬ
志まらぬ松をまらぬ松の
松を松のまらぬ松の
山まらぬ松のまらぬ松の
飯糰まらぬ松のまらぬ松の
松まらぬ松のまらぬ松の
おれまらぬ松のまらぬ松の

翁
如翠
川高
惟然
支有
翁
翠
翁
然
翁

持佛の息を多うさしこむ
平陸千葉を毎冬一ふんこ
秋風さする門の片風
下等て張ふ細る月のけ
尾強いつきし元より
端みよりのまをゆき
正月のまをゆきし
去風の舞踏口はより
蕨々々村々々けり
うらうらぬ舞も芳た
白雲の対る山は
花苞を捧ぐ付る枝

芳 翠 翁 然 芳 翠 翁 然 芳 翠 翁 然 芳 翠 翁 然

こころをゆきし
おろしと先年より
深の白雲を
春のまをゆきし
花苞のまをゆきし
射付くまをゆきし
そらへりく
法苑のまをゆきし
言微をゆきし
今も
大きな
まをゆきし

芳 翠 翁 然 芳 翠 翁 然 芳 翠 翁 然 芳 翠 翁 然 芳 翠 翁 然

橋りけはるし一花樹の下

六十四

のしと揚の扇や雪の峰

青葉をらつて又主の約

流を流す舟を舟に送

くみれり家も他は原中

月のあはれの花子あはれ

大方虫のふもそらへ

かろくをよめし秋の雪

直くつて人の心伝

さめくくと物を思ひを待

箱

安世

支考

空芽

公就

丹野

牙

翁

老

秋のゆらやうしむ海際

山にそよ風を付るる

去向の風を吹く

能紀のむす子の居る

まろくは戸の雪外の本

多心とめていひの中

らつとりの枝をけり

月をを紀の言をが

りらけりや猫さうり

石塔をんふもそらへ

宵とけ伸しる将多つ

こくめんれ仲言の字

結通

翁

牙

就

老

芽

老

老

葉のうしろの三味に種め 敏
うのうと揚をたると懸る取
きくうにすうに誇りし
楯基のらひきくふちうくやち
るまよと地やとまこころ 和
焚念を割てと中の冷く
おまひ居てもぬえくう
此くろく八の角のあまきくうひ
物あのがまてしうぬをくくす
狼まのふ尾のちをぬえく
角力うかけしうくくく
ひくけい山は村の一角した

望翠 云芳 身袋 翁 松 翠 菊 袋 木白 力 翁

うりとうくく一軒の嶺の果
様さして染くうく好庵の赤
去うやさうさう去の風す
坪割の川原の石流くゆけ
白南くくくくくみくく
天急の竹の長さの果とあま
命心の噂めかろう血のそ
一井を伐きくく木ぬ酒の拍
響のく庵くあしと行よ
燈火く草屋 細子の板は文
袖のちき此桐くく先
帚木を菊めく生く菊く

袋 菊 翁 翠 白 力 翁 菊 翠 菊 翁 菊 翁

干かゝるの志あり三月
 神主の沙汰を拵て上りて
 志ありて岸の体心茂士
 衣冠を拵するも新し
 かたしとて屏の裏にお
 耳儒をそらして杖をさき
 行義の悪女居る六尺
 大少のれ楯引所けり花の底
 宋の福子のとる心二 月

法ありと第をもとて板金か

望翠

井のさく色を和所し一吹
 初月の難き女一皮を振る
 せ凡ハすの厚と豆腐受きり
 大ハの通るるのく狭小紙
 所老の魚子編笠と冠は
 襖ありとあはれ川おとし
 燈中一牛を蹴りとたやう
 嫁入の赤しと知やれ門中と
 杖と子履を拵りて一玉
 一燈等々きまらる存心氣
 籠釣ありかたきりし海
 大少のさくして田子も島も

惟然 出等 雪笠 旅籠 二箱 卓袋 九節 芝 翠 然 籠 箱

昔より物もよき小娘子の旅
とありしみちしきく見事の端
珠持まゝし祖母の位 ころし
吉ぬき花の木くけの一枚
何れもやうなきよきものか
旅籠屋の位くさけハちま
あついのよりよきものを信
舟板の九季母をいふもたひ
とよくすれハ居風ものもつ
持穂の一日底子といふころ
あふつとくハこれけハハ
毛月の入しとれとる花月市

袋 芳 翠 芝 菊 袋 芝 種 芳 菊 種 袋

昔の春ころのゆるい小葉種
百のゆれハ又尺くある給の持穂
とよき手より色坂の秋
在りし志けし満したるとか
引きし菊をよして玉花の門
いとくさくさくさくさくさ
あつくと燈籠とけり目のか
いとくさくさくさくさくさ
さハくと菊の浪より大先
物よりよきとる花月の居

袋 翠 芝 菊 袋 芝 種 芳 菊 種 袋

陽る故千 殆きしふる夜半に
紺着ふりく子 尺さるるさの能
夕月の定る 松ハ宮より 更さる
くす神いろし 吹く 霞 隙
あともさくぬ 二人 走る川 互に 花
こ 少らく け 至 雲の け け ぬ
煤 螢を 同利の うちを け け
物し 号 ぎ 門 の 鯨 け け
大木の 梢ハ 枝の け け け
時より 麦 け け け け 物
山 け け け け け け け 物

雪草

霜
古芳
風表
玄命
若良蘇
菊
麦
芳
蘆

一里 け け け け け け
掛物の 布 袋の 鳥 千 月 け け
百の 葉 け け け け け け
秋風の 雨 なる け け け け 上
から け け け 舟を け け け け
美濃山ハ け け け け け け け
と け け け け け け け け け
け け け け け け け け け
け け け け け け け け け
の け け け け け け け け け
柴 焚 け け け け け け け け
雪 竹の 杖の け け け け け 業

菊
芳
蘆
麦
芳
霜
玄命
若良蘇
菊
麦
芳
蘆

山は流るる千かゝりて
昔のまじりたる足くさる花
花のうけやうに掃と先
昔のまじりたる足くさる花
昔のまじりたる足くさる花
昔のまじりたる足くさる花
昔のまじりたる足くさる花

支考

松風より新風をすらすね
月よりまじりたる足くさる花
河の門おひらき舞の飛らえ

旅籠

松よりまじりたる足くさる花
松よりまじりたる足くさる花

箱

秋風よりまじりたる足くさる花
秋風よりまじりたる足くさる花
秋風よりまじりたる足くさる花

酒考

年歴不知

松松よりまじりたる足くさる花
松松よりまじりたる足くさる花
松松よりまじりたる足くさる花
松松よりまじりたる足くさる花
松松よりまじりたる足くさる花
松松よりまじりたる足くさる花
松松よりまじりたる足くさる花

吉本

許六

箱

菅良

十那

格をばけ くのほろさの収
つり 桐子坊をきよめふれ
阿の言らうみへ 八の句
林ののちう 題のをひきて
天うられと地まはらん

何れく 柴吹風をゆえれと
白の夕へ 生けりし

ふりうらむをきりて 付のひか
こころしとあふハ 紙のふんし
ふの鬼尺とししと 虫の火

白ふれてうらむ 桐の家 窓
母方のまき紀て 月の物さひ
嵐の籠る 老生葉の 中
傍穿の髪を 結め入 妝の向
さくれのひら けり 海は 志むし
か奈とハ 志うひ 命きの 二の 身
せんとの 風子人 死つ 阿つ
あをきふふ ちば 彌う 阿て
たうけえ 結の せうり 阿
漱の 今ハ すすむる 為 暫 張
か 滅の 業 志 阿 ちう 阿 志
消 滅を せうり して くれハ 志 阿

考 紫 籠 考 然 其 籠 紫 其 考
考 籠 翠 籠 考 然 其 籠 紫 其 考

六 末

秋風

箱

箱

こぼれて生る 柀のむけー
約みの露の湯たうも尾の業
物ハ次中子生の清やつく
枯もさすふくくくくくくく
月尺のいりも造化せりる
智もゆるくくくくくくく
候の小家をもくくくくく
懐子もあしーくくくくく
いそふの齊と白豆腐もは
香陰の巻くくくくくく
根毛つーくくくくくく

袋 籠 袋 然 翠 考 袋 籠 袋

積りのまれくくくくく
むを寧くくくくくく
水かきくくの中くくく
藻井よりくくくくく
難くくくくくくく
通くくくくくくく
色は家一くくくくく
屋ら柄くくくくく
舞くくくくくくく
中ふくくくくくく
野々のくくくくく

沽圃
菊 支考 惟然 菊 然考 菊 然考 菊

いとく暇たうりきり君の
幸ありけりま 葉の枯の概 楓
山千門あつるの 月
神慮ふくけの人のうけ也
あまの光の懐のふい
足て通了 紀三升八花の足
荷持いともいとも 永そ
こら風の又西き 初よふ
家より 縁を大るうり
懐のゆあはく 度底き
吟嘆のきこむきこむ
大切ぬわりたりも 尊は 隆

為然者 為然者 為然者 為然者 為然者 為然者 為然者

空く記るけり 中の恨
末の恨との字掛ハえれ出 家
真の幸益ハ 近季の他
運とくも 春のやま月尺
茶籠 段を 庵の 正 面
ささすか ぬ娘のくる 赤き
命汗のささる 方々の 管
も 筋を けり 起す 木の 風
大工は 心の ねく 中 仰る
米 搗より ありし 向
かへ ありし 市井を 押 ありし
此 何 ありし 跡生ハ 花の 幸ありて

為然者 為然者 為然者 為然者 為然者 為然者 為然者

野のゆきゆきのまゆけめを

考

松茸や初子らうふ山の取

惟然

雨子躑躅の志るふ秋の

云芳

おさしるく嘸す可月言て

翁

すこ入人あふ次の風風る

然芳

くこひさるさやそし一五也

然

このきこみる夜来して

然

あけぬ熟柿をこむすく

然

至て也く一停葉の秋枝

然

麻走ふくして古風の奈生く

然

肉羨むし未の酒のとれ際

然

ちまつま又と痛みの泣くけ

然

と膏の冷の湯芽生のや膏

然

そのゆふふとくたれし一之

然

尺すのほとれがゆ魚籠の肉

然

ろくろはくく向の丸の外

然

魂を引くく響の上ゆり

然

行よしの市をきてを流る長谷川
畦止亭あし月を尺竹く

外うすしふ不智の月尺く丸
秋のゆきゆきに魚籠を

畦止

家のりる地を菊池子に宛て
 川のほとりなきこのむ中へ
 此下ろと来て去月を尋ねて
 板の枝をたれりし色
 海川よりけ玉笠を引て見
 火のともりし亭のつとみけ
 墓とれハ板のうらんの泣き
 坂下して一里ほど来て
 思ひし子とまゝし牛の糞
 村のかん女子集り病
 嫁とらハ女くらしし坊をけ
 大りうら子此秋の書やけ

惟然 酒堂 支者 之道 青流 止 然 堂 翁 流

七廿

けの定を又呼ぶし秋の月
 すまきの中へ啼くさみ
 病をきてまれりし遊子のけ
 折くくぬまの旅人
 阿くくく浪の書はのりけ
 志くくく尺をけしよ葉 庭
 めりきくと油の書詩あうら
 又のりあやう羽折るけけ
 名号をたう尺をくくし樽者
 竹橋のくく山川の末
 大根も羽根をきうし秋を
 名枝をくく月のやけき

是 翁 堂 是 流 然 堂 翁 止 是

七廿

ゆきつれぬ宿きこ月子心ねおきよ
半道他てまの陰子たる
幸とくを計ふはつゆり
地を志ぬるはつゆり
惟のほかりをて一羽 籠
ありあきあひの持さけては
舟人をあひの住まう三舟の種
枯は葉を浮山よりたぐ
人しの尻と尻の如花差
咀のくつきを籠まうつり

菊月廿二日に車庸亭

止堂花流菊是流考堂然

秋の夜を歩きの一なる喚可菊
月よりの舟のハ菊葉をうり
西の山にたれ三たふ居居
走、ゆるすけのよくうこくこ
男の居をかんまに書ふ志性先
小袖をわしる病らる大条
使やうもやをさして折るはれ
かへてと醫者の尺さぬれ
枕心と意（の）枕きし
室てあつ舟由の 梳
比より尾谷りけり考り
すまきりふくハ妙ハんし色ま

菊 車庸 酒堂 游力 泐竹 惟然 支考 菊 庸 堂 力 考

春の末ぬ夜ハ有償ッ百の換
両季の月の不ろき川 筋
火くもーい業沙をふの流々鼻
七種やししハよろしに際ふ大
兄さるはあ鞠の菫花やうす
小庭形あ〜ふを秋のま

然堂力翁唐

此そやけ人きーす秋のくれ
吐のたふけの末うりうの草
月〜いむ草葉のそむれをの流て
らふまふ家をむし〜あ〜む

遊力 支考 泥足 翁

了季合羽衣を入れて荷鞆を
酒しい〜みのとらる 後ろを
にせぬきさりのまきまか〜
幄の夜ふの上ふ梅らる
縁色とまきのまきのゆすぬ
蛭子の餅の張るまき〜
は〜の〜有する季ハ候ふま
かくさふ華とす〜る松風
け〜しと山田の臨ハま〜れて
地花の煙の秋ハ〜
仕子あふ〜の〜の舟の月
塩飽の船のと〜と入らむ

飄竹 車齋 酒壺 睡止 惟然 翁柳 足 翁 唐 竹 考 唐 然

お例々取不醫志の足りさ 止

園女事

志らるるの目とそし足る庭とれし
 もらうる多をものごとくお月
 ひやしと鯛の尻尾を折まけて
 向うととさうと手はられり
 小ふらりて空右の路の煙ひらり
 ねとあてふしめ ね
 何とて入る種子私をにめし足る
 袖ふさくくし 親の名代

園女 瓶竹 渭川 支者 惟然 洒堂 舍羅

垣にいらしめと盤の乳いよと
 夢情のうらみは小座て火を焚
 仰ぐぬと熱の煙のさえすりし
 風ふりてのこむ子端のすり知
 とれしと肉のむらり秋の森
 秋浩ひけらる町右の秋
 吹れとやう漬く通る青花
 ひくんのめくさられしかく
 青きハ縁うもえらる茶室の赤
 白代討の一かきふむ
 通心筋を横とあはねくいふ
 志らるるをわらうたくのわら植

何中 翁 女 川 考 然 室 翁 中 川

何となくと色づくつくふ雪の蓋
雪のくくくはひりふく風
柴のくくくはひりふく風
清きくくくはひりふく風
上らぬ橋の音は川の音
植木の葉を静かにさつ
小かたはひりふく風
行の仕かひりふく風
有教も今も穢れぬの長
杖一本とその短さし
形跡のそれをも神のめきれて
むららに娘はひりふく

壺 女 翁 竹 然 翁 川

餅ちきる環のゆるりの娘さ
妻のぬきぬきの積りくさ
河の水のほそきまきく
木のさし木さし 伸び

女 壺 然

百葉の木の葉のゆるりの
第の木の葉のゆるりの
味くくくはひりふく風
柳のくくくはひりふく風
田舎のゆるりの娘さ

翁 浪化 古来 如舟 翁

兼終あすむしるのけや夕涼し
出翠

雪うけゆく空陽まの花
翁

いあつひに歌うえの戸はうれ
大芳

たうけ境すのひの。夜 黍
花結

清なる海のおそよ秋まて
翁

またれうらふら秋のりく
葵

又あつひに歌うえの戸はうれ
柏

松風こもつ山の中へん
翁

わしやうらふさりのそねのそ
雪は

見たりハ浴衣の裾を引する
雪芝

せりともおわしすうらうつくと
惟然

この山すうておと
車袋

床あふの草履の履ハまれうら
望翠

床て天もまをこそくしと刺
彦

更いす梅行の終をもよほ提て
花

空鳴の中をそぞろ引のけ
共

仕合と夕陽の舟ものうらんと
翁

あふけと餅のあふれうらつと
翠

せましくとほふもをうらまは
袋

大工屋根屋の隅のうら
翁

月のあつむをうけぬ
味 彦

向の海は昔白ゆきや
きハコをとも車しても回一
親とふ言をいしく秋
月影を又く之の責を
かきし藤志の信はひや
咲つたや毎春新芽を
二 跡をさくけてはたば
春と猪のけめの跡を
肉をのちる子供はこれ
を湯の門のき入ると
一里の舟と後のすま
山ハハ密柑の色の青
本

其 皆 考 翠 然 紫 考 翠 考 翠

かれ果るくふ髪のはき
咲花つよきてをうけり
島山やゆりの山や山
言上り酸るくえし
青のうをながる山は月
芽あけくう小男麻の
望みしこれくを新
炭くえく小信

冬のみめこのゆきハ佳く
 世々々々々々位のきりやれ
 尾中りしりりりみ病の積
 尾のうき火とりりるきりけ
 うねの百玉のお練のきりりき
 二河原に西と破のきりりり
 吹

秋の風ハ豆かき吹
 小信ふりりりりりりりりり
 新解のけきりりりりりりり
 家急ハ色紙も持るりりりり
 字目りりりりりりりりりり
 すききききききききききき
 入海の限

後おろしらく梅の嶺とく
更科の里の砦をゆめしり
端はくられしゆきみ石竹
友ありしきりしと物せふ
新つ志しのかひなくあはれ
際ふりしうら猫の志白
人しるぬ中を火燈をもよほ合
沙走のゆき折指りぬし

楊子 平儀の舟走人つま
石子 子細ふ小館をよりかて
棋掃のそり大さるるわし
白心の人とと中しきりし
待つて人とにしし時方
釣ひききし小松平もこの陣し
横もこむしり市のゆきとる
大和路へ入るるるすも花曇

此一きのうのうらハかくの秋之
きのふうふたハ梅のあしり

俳諧一葉集附合之部 終

江都書林

下谷御成道

青雲堂英文藏板

小學本註 二冊	增補文語碎金 二冊	八面鋒 四冊
扶桑蒙求 三冊	宋名家詩選 二冊	晚唐百家絕句 五冊
題画詩類鈔 二冊	香齋集 一冊	和歌題百絶 一冊
三大家絕句 一冊	蜀山先生詩集 一冊	東征稿 二冊
漫遊文草 五冊	昔々春秋 一冊	酒中趣 二冊
左傳凡例考 一冊	左傳比事 一冊	歲華一枝 一冊
歲華一枝拾遺 一冊	名乘字引 一冊	名乘字彙 一冊

略註五經字引	一冊	篆書字引	一冊	易學小筌	一冊
書家必用	一冊	書家錦囊	一冊	書家便覽	一冊
古韻通叶	一折	醫書之部	一冊		
		治痘要方	一冊	治痘要方補遺	一冊
痘疹戒草	三冊	痘疹養生訣	一冊	痘瘡食物考	一折
治痘要訣	一冊	續痘科辨要	三冊	種痘辨義	一冊
保嬰須知	二冊	方函	二冊	日養食鑑	一冊
雜書之部					

三省錄	五冊	世事百談	四冊	瓦礫雜考	二冊
東汴倉百首	一冊	子昂真草千字文		子昂龍興寺碑	
隸書醉翁亭記		蘭竹畫譜	二冊	竹沙小品	一帖
光琳百圖	二冊	光琳百圖 <small>後編</small>	二冊	光琳百圖 <small>後編</small>	二冊
畫圖撰要	三冊	一蝶畫譜	三冊	蕙齋略畫	二冊
刀釵圖考	一冊	刀釵圖考 <small>二篇</small>	一冊	裝劍備考	一冊
鞍鐙圖式	一冊	甲冑着用辨	二冊	貞文家訓	一冊
田畑調法記	二冊	百姓袋	一冊	按孔方圖鑑	一冊

珍錢奇品圖錄 一冊

古錢鑑

一冊

佛鬼軍

一休 一冊

三畏一心記

一冊

日蓮御代記

一冊

善惡種蔣和讚

八部技講釋

一冊

曆日講叙

一冊

將棊圖式

一冊

歌書之部

貫之集類題

二冊

香川景樹集
桂の落葉

二冊

海野遊翁詠
柳園家集

二冊

千町拔穂

一冊

園圃拔菜

二冊

萬葉用字格

一冊

靈能一貫

二冊

源氏物語系圖

一折

手柄岡持狂歌狂文
家あそび

二冊

蜀山百首

一冊

仮名類纂

一冊

竹村茂枝集
穂向屋集

三冊

俳諧之部

俳諧故人五百題

二冊

續故人五百題

二冊

掌中故人五百題

一冊

新五百題

二冊

新々五百題

二冊

嘉永五百題

二冊

今人五百題

二冊

續今人五百題

二冊

今人五百題

三篇 四冊

近世五百題

二冊

白雄坊五百題

二冊

過日庵撰
今人百家類題

二冊

過日庵撰
近世十家類題

二冊

名所千題集

三冊

題林發句集

四冊

十萬發句集

四冊

乙二七部集

二冊

曉臺七部集

二冊

今七部集

二冊

嵐雪句集

二冊

發句類聚

二冊

發句古今撰 二冊

過日庵輯 蒼虬翁句集 二冊

今人發句集 二冊

俳諧寐癡 二冊

饒舌錄 二冊

過日庵撰 名家類題 四冊

一葉集 芭蕉翁一代集 五冊

一葉集 後篇 翁之文消息 四冊

俳諧集草 十六篇

俳諧四季草 四冊

安政五百題 二冊

過日庵撰 類題金玉集 四冊

風俗文選拾遺 二冊

梅澤先生手本向

庭訓往來 一冊

風月往來 一冊

千字文 一冊

消息詞 一冊

庭梅帖 一冊

御成敗式目 一冊

女今川 一冊

女推俗要文 一冊

新三十六歌仙 一帖

雪後帖 石摺 一帖

新撰詩歌合 一冊

續撰朗詠集 二冊

實語教童子教 一冊

諸流手本向

尊園古今序 一帖

同真名序 一帖

尊朝滿相景 一冊

大橋庭訓往來 一冊

大橋新年帖 一冊

橋心敬庭訓 一冊

正敬商賣往來 一冊

蓮池堂法帖 一帖

瀧本芳野道記 一冊

瀧本鴻書帖 一冊

雜書并繪入物之部

曲亭馬琴案文 雅俗要文 一冊

十返舎一九案文 諸國書狀指 一冊

教訓圖會 <small>前後</small> 二冊	皇朝三字經 一冊	繪本國恩俚談 一冊
大學笑句 一冊	裁縫早手引 一冊	米錢胸算用 一冊
每朝神拜小言 一折	<small>式亭三馬作</small> 小野馬鹿村 一冊	<small>十返舎一九作</small> 附會案文 一冊
<small>山東京傳作</small> 滑稽文選 一冊	安見道中記 一冊	唐土名所の繪 一拵
甲越勇士鑑 <small>前後</small> 二冊	諸職雛形 一冊	花鶴百人一首 一冊
女大學玉文庫 一冊	女庭訓往來 一冊	



天下登龍丸 食物一切
合せ

たんせききつりいん一夜あやした母薬

一包代百文
一巡り代六百文

此登龍丸、天下一方我家の秘法にて、痰咳留飲一通りの母薬
あり、積六十年、女軍痰咳にて、上狗痛、立居成が、又留飲
を、女軍、胸痛、夜も寐も成らざる、種々、症を、
重きハ一巡り、数年、未の難忘ハ三巡り、も用ゆ、時ハ、
痰を治し、咳を止め、留飲ハ、胸を開き、病全ク、いゆる、
は、是より、固て、心氣の、疲れを、補ひ、血を、巡りし、脾胃、
調へ、氣力を、復し、考を、立云、舌、さ、の、よ、良薬を、
調へ、氣力を、復し、考を、立云、舌、さ、の、よ、良薬を、

延命の事 救万人用して試て其切の才あるより古今に
及希代不思儀の妙薬之に切なる者あり

一 十年女年喘息 一 勞症の咳 一 引風の咳

一 からげき 一 因喉せうつき 一 痰飲取法ある契

一 痰血の交至 一 痰飲吐ても出せ 一 動氣はやく水沖

一 小兒百日咳 一 婦人産後後の咳 一 留飲よて胸痛

一 留飲よて乳塞り 此介痰咳留飲より起る病一切よはし

一 舌厚をばはつ小人時用ゆの時をばはつる者妙し

抑痰咳の薬昔より法の由物より多く其薬より受くよりして

引札の痰咳の言及ぶに痛癢近も速よある松よりして

引札の痰咳留飲の痛の言及ぶに治難き者此松の妙薬也

年々も痰咳留飲より医療をばはく百草をばはくよりして

治難き難症より速に治す薬予が家の名法よて万人

を救て試するより人にて治せざる者一徳て天下を及の薬業

よそ傳よ教あり志回あるら其切能速ありしり下し薬業

婦人産後後の咳の言及ぶに治難き者此松の妙薬也

偽ある名法あるを認る 尤印より約薬業多くは留

色紙より紙條より上左よ志を取次書よて其味より下は

東叡山御書物所

江戸下谷御成道
青雲堂英文藏製

大坂心新町	出雲寺文次郎	同會傳系松	伊勢屋忠忠
三島吉田	江戸屋五之助	任員松本	高員屋忠忠
遠州中泉	涌屋大右助	同善光寺	小林屋忠忠
尾名古屋	永田屋忠忠	上員吉崎	沢田屋忠忠
遠州下目	伊勢屋忠忠	上総徳浦	徳田万範
新丁福	天満屋武之助	下総多古	土屋勅次郎
下総佐系	正交堂利之助	豊前杉本	釜屋忠忠
本丁七丁目	須屋安次郎	越後三条	扇屋七右衛門
駿府吳波町	久米屋徳次郎	同水原	小田島俊之助
加名金津	八尾屋忠忠	甲府魚丁	村田屋忠忠
生員佐々天町	堀越常三郎	生員安次	万屋利之助

